

に引き受けて執筆されている。他の執筆者も同様であろうと思うが、これだけの章を一人で担当され、かつ所定の分量に記述を集約していくことには多くの努力と泣く泣く省いた内容があったものと推察する。また巻末に大変便利な年表が30ページにわたって掲載されているが、これは三崎裕子氏の手になるものである。

本書の全体を通じて言えることは、「医療史」というタイトルからみればむしろ当然であるのだろうが、「人」と「病」と「医学」と「医療」、そして「社会」の5つの要素の相互関係が常に念頭におかれて記述されていることである。この構造だけをとりても、本書が他の類書と比してもその独自性と学界全体にあたえる意義は大きい。もちろん、個々の史実についての書き込み方についての精粗はあるだろうし、各分野の専門の研究者からみればさらに補足を要するという点もなしとはしないだろう。しかしながら、全体で350ページ程度の本にこれだけの内容と解釈を盛り込んだ本

を刊行した壮挙の意義はいささかも揺るがないだろう。

本書を評することを結ぶにあたり、新村氏のプロローグで述べられていることを再び思い起こしてみたい。新村氏がそこで考えていることはまず「よき死」「よき生」とは何かである。「頓死往生」、つまり苦しまずに自然に死を迎えること、これを保証するために医療は何ができるのか、そして医学はそれをどのように導くか、そして社会はそれをどのように支えていけばよいか、これを考えていくことが医学や医療の使命であるという透徹した思想が編者の新村氏にあるようにみえるのは評者だけの憶見なのであろうか。ともあれ、このような労作をものされた編者の新村氏と著者の方々の意欲と見識に心から感謝したい。

(瀧澤 利行)

〔吉川弘文館、〒113-0033 東京都文京区本郷7丁目2番8号、2006年8月、四六判、388頁、3,500円+税〕

## 片桐一男 著

### 『それでも江戸は鎖国だったのか——オランダ宿 日本橋長崎屋——』

オランダ  
紅毛も花に来にけり馬に鞍

長崎屋自分のうちに分けて入り

この川柳は、毎年3月に入るとオランダ甲比丹の一行が、着かざって行列をととのえ江戸へあがって来る。その時の江戸日本橋附近の風景を詠んだものである。紅毛さんの顔はどんな色つやか、鞍にくくりつけた荷の中身は何だろう。どんな献上物であろうかと、物見高い町人が本石町の長崎屋の前をうづめつくしている。紅毛宿・長崎屋の主人が群衆を押し分けて紅毛人を案内しなくてはならぬほどの騒ぎである。寛永10年(1633)以降の風景で、後に葛飾北斎は「長崎屋図」として絵描いて一作としている。

だが、江戸の異文化交流サロンの出発点としての長崎屋については、案外知られていないのである。長崎屋自体がその後類焼に次ぐ類焼にあっ

て、いっさいの記録を失っているからである。

本書の筆者片桐一男名誉教授(青山学院大学)は、蘭学史研究に研鑽され、ここ約10年の間に10冊ほどの著書を上梓されている。なかでも『阿蘭陀宿海老屋の研究』、『レフィスゾーン江戸参府日記・翻訳』、『阿蘭陀宿長崎屋の史料研究』等の一連の仕事には、眼をみはるものがある。これら的大作の中から論点を抽出し、検討と考察を骨組みに補充の手を加えて、新たに蘭学研究者に役立つ長崎屋論をまとめ上げたのが本書である。私流の目次案内でまづ紹介しよう。

◎江戸の異文化交流——プロローグ

(知られざる江戸の長崎屋、異文化交流サロン、見えてくるその実態)

◎江戸のオランダ宿・長崎屋

・江戸の長崎屋とはなにか

- ・その実態をさぐる

◎幕府とカピタンの情報が入る宿

- ・幕府御用と商いの道
- ・飛び交う情報のなかで

◎カピタンと蘭学者たちとオランダ宿

- ・オランダ文化のサロン
- ・カピタンとの交流
- ・長崎屋のたどった道

◎異文化交流の実態——エピローグ

◎あとがき

◎関係著作

となっている。

カピタンの江戸参府という行事（寛政2年（1790）以後は4年に1回に改定）は、オランダ国が徳川幕府に貿易御礼の言上をするセレモニーであるが、これにからめて諸々の事柄が異文化交流という形ですめられている。長崎屋にやって来たのは、異国人の他に、長崎奉行所からの役人、通詞たち、幕府の天文方や訳員たち、お忍びの諸侯たち、江戸の蘭学者たち、警備の出張役人、越後屋をはじめとする出入商人、江戸城内の長崎懸りの御坊主まで来たと本書では述べてある。つま

り、江戸蘭学者らが後日まとめた「西賓対晤」に登場するような官に認められた蘭学者・医師のみではなかったのである。

それだけではない。長崎屋の2人の娘は、カピタンから金縁のガラスコップや指輪などのプレゼントをもらい、後日長崎に礼状を出している。勿論、蘭文に訳してもらった通詞の代筆であるが、頼めましい私的な交流もあったという。

医学・医術の情報授受については、申すまでもなくシーボルトを頂点として多くの研究者の仕事があるからであろう、医薬品関連を略記するにとどまっている。長崎屋が白砂糖の輸入や朝鮮人参の販売などにかかわっていた（医薬品業を兼ねていたとも云える）のであるからもう少しこの部門の幅を拡げてほしかった。それはともかく、本書は蘭学に心寄せる初学者の入門書となることは間ちがない。本書を読んでオランダ語を学ぶ人が増えることを祈ってやまない。

（中西 淳朗）

〔吉川弘文館，〒113-0033 東京都文京区本郷7丁目2番8号，2008年10月，四六判，196頁，1,700円+税〕